

皆さんこんにちは。
エンカレッジアンドカンパニーの堀です。

私のコラムでは、中国の故事成語について、我々の日常に何か応用できないか、という観点でシリーズとして書き綴っています。

第 11 回目は「漢中（場所）」についてです。

以前はあまり意識していませんでしたが、孫子の兵法を読んでからより意識するようになった「場所」の概念にフォーカスしたお話しをしようと思います。

おそらくこの「場所」の概念は日本人より中国人の方がより強く意識していると思います。それは孫子の兵法の九地篇や風水等からも垣間見ることができます。

漢民族や漢字の「漢」の由来となる陝西省の漢中は、北は秦嶺山脈、南は大巴山脈に囲まれた盆地にあります。

戦国時代の都は、険しい秦嶺山脈を越えた長安付近なので、中国の中心そのものではありませんが、中心を治める足がかりとして意味のある場所でした。

その本質を捉えると漢中は、孫子の兵法の九地篇でいう「衢地（くち）」に該当すると思います。

「衢地」とは、多くの諸侯の利害関係が集中していて、奪った側の勢力を大きく増進させる場所です。

孫子の約 200 年後の劉邦は、ここ漢中に左遷されるも密かに力を蓄え、漢王（漢中王）を名乗りその後中国を統一します。

統一後も国号を漢としました。まさしく漢中が「漢」の由来となります。

三国時代は、張魯が険しい山脈に囲まれているのをいいことに、独立国家を築いていました。それを曹操が平定したものの、漢中より更に南西の成都を居城とする劉備が漢中を曹操に取られたことを危機に思い、激戦のすえ奪い、劉邦にあやかって同じく漢中王を名乗ります。

曹操は漢中の奪還を試みるも険しい山脈を越えなければならず長期化し、

「鶏肋（けいろく）」と言って諦めてしまいます。鶏の肋（あばら）はほとんど肉がついてないが、スープをつくるのには良い。

そのさまを漢中に喩えたわけです。漢中は大し役に立たないが、捨てるには惜しい。

Encourage & Company

私はこの「鶏肋」は曹操の負け惜しみに聞こえます。漢中の持つ意味は歴史が示しており、孫子の兵法を分類しまとめた曹操自身は良く知っていたと思います。

その後、諸葛亮の北伐の拠点になり、あの時奪還していれば良かったと思ったでしょう。

①今は群雄割拠の戦国時代ではなく、平和な統一後の世の中であるから、漢中を治める意味は多くなく

②時代の観点から、物理的な場所に加え、SEO 対策等ネット上の場所も意味あるものになっています

①状況と②時代により意味ある「場所」が変わっていき、いずれにしてもその場所が「衝地」なら治めることによって勢力を大きく増進させる。

ビジネス上の「場所」、再確認してみてもいかがでしょうか。

堀 洋三

-バックナンバー中国故事成語をビジネスに応用する-

第1回目は「牛耳る」

第2回目は「鳴かず飛ばず」

第3回目は「司馬懿仲達」

第4回目は「我れ鳥獣にあらず」

第5回目は「国士無双」「狡兔死して走狗煮らる」

第6回目は「鼓腹撃壤」

第7回目は「外戚」

第8回目は「論語①」

第9回目は「東郭先生と狼」

第10回目は「孫子の兵法」